

皇后考

原 武 史

これまで、近代天皇制の研究といえば、天皇が中心でした。明治、大正、昭和の三代の天皇の生涯につき、数多くの研究がなされてきたわけです。そこには、天皇制という用語それ自体が暗示しているように、天皇にさえ注目すれば、近代天皇制はおのずと明らかになるという暗黙の前提があったように思われます。

だがそもそも皇后というのは、天皇の後ろに控えるだけの存在なのでしょうか。言い換えれば、天皇の「添え物」にすぎないのでしょうか。確かに大日本帝国憲法や日本国憲法には、天皇に関する条文はあっても、皇后に関する条文はありません。皇后が勅語や詔書を発布することもあります。しかし、天皇家の長男として生まれれば、あるいは長男でなくても結果として唯一生き残った男子になれば、その瞬間から天皇となるべく運命づけられたのに対して、皇后となる女性は人生の途中で天皇家に嫁いできます。このため、天皇にはない葛藤が生じ、もがき苦しむなかで皇后とは何かという、天皇にはない強烈なアイデンティティの意識が芽生えるのです。

天皇は血統によって、アマテラスや神武以来の各天皇とつながっています。一方、皇后はそうではありません。けれども、女性天皇を除く歴代天皇には、皇后に相当する女性がいました。そのほとんどは無名ですが、推古天皇は敏達天皇の皇后から、皇極天皇は舒明天皇の皇后から、持統天皇は天武天皇の皇后から、それぞれ天皇になっていますし、たとえ天皇にならなくても、男性天皇を上回る権力や名声を勝ち得た皇后もいます。

その一人が、第14代仲哀天皇の妻であった神功皇后です。『古事記』や『日本書紀』によれば、神功皇后は仲哀天皇の死後、応神天皇を懐妊したまま対馬海峡を渡って朝鮮半島に行き、新羅ないし新羅、百濟、高句麗を平定して九州に帰還し、現在の福岡県の宇美というところで第15代応神天皇を生み、約70年間にわたって応神天皇の摂政をつとめたことになっています。福岡県には神功皇后にちなんだ地名が多いのですが、宇美という地名も「生み」や「産み」に由来しています。

自ら海を渡って外国に赴き、外国の軍勢と戦って勝った天皇というのは、歴代天皇にもいません。この男勝りの大活躍を、天皇ではなく、皇后がしているのです。特に『日本書紀』では、神功皇后のためにわざわざ一巻を割いているように、神功皇后を天皇と同格に扱っています。

もう一人が、第45代聖武天皇の妻であった光明皇后です。正式な尊号は中台天平広真仁正皇太后といいます。仏教に皈依し、貧しい人たちに施しをするための悲田院、医療施設である施薬院を設置したことで有名な皇后です。その慈悲深さは、ハンセン病患者の膿を自ら吸ったという伝説からもうかがえます。病人のためにここまで尽くした天皇というのも、やはり見当たりません。神功皇后が男勝りの猛々しい皇后だとすれば、光明皇后はまさに女性的な、慈愛あふれる皇后といえましょう。

明治以降の皇后が第一に模範とすべきとされたのは、神功皇后ではなく、光明皇后でした。明治維新とともに軍事指導者としてふさわしい天皇像がつくられてゆくと、それに並行して新たな皇后像がつくられてゆきます。明治天皇の皇后となったのは一条美子で、天皇よりも三歳年上でした。皇后美子は子供が産めない体質だったといわれており、天皇は皇后のほかにも女官たちを側室にして子供を産ませる一夫多妻制が維持されていました。けれども表向きは、西洋列強から近代国家として認められようとして、天皇と皇后の一对の「御真影」をつくり、一夫一婦制を演出しました。

天皇はヒゲを生やし、軍服を着用し、馬に乗るなど、男性化が図られるのに対して、皇后はマントドクールやローブデコルテといった華やかな洋服を身にまとうなど、一層の女性化が図られました。そして病院を回って兵士を慰問したり、日本赤十字社の総裁になったり、養蚕業を奨励したり、女子だけの教育機関を訪れたりしました。病院を回り、戦争で傷ついた兵士を慰問する皇后のイメージは、光明皇后と重なります。しかし神功皇后とは重なりません。神功皇后は、むしろ軍事指導者としての天皇のほうに重なるからです。

1900（明治 33）年、のちに大正天皇となる皇太子嘉仁が、九条節子と結婚します。嘉仁は 20 歳、節子は 15 歳でした。実は嘉仁には、伏見宮禎子という婚約者がいたのですが、医師の診断で子供が産めない体質だとわかり、急きょ九条節子にさしかえられたのです。明治天皇の子供はすべて側室から生まれたことから、容姿よりも子供が産めるかどうか重視されたわけです。

皇太子妃となった節子は、期待通り、子供、それも皇位継承権のある男子を産みます。1901 年には裕仁（のちの昭和天皇）が、1902 年には雍仁（のちの秩父宮）が、1905 年には宣仁（のちの高松宮）が、次々に生まれました。これにより側室制度は有名無実化し、一夫一婦制が確立されました（実際には皇后になってからも、節子は嘉仁の浮気癖に悩まされることになるのですが）。

宮中における一夫一婦制の確立は、皇后の権限を拡大させることにつながりました。明治から大正になり、天皇となった嘉仁が体調を崩してゆくと、皇后となった節子はますます存在感を高めてゆきます。

皇后節子は、美子とは異なり、光明皇后ばかりか神功皇后にも肩入れするのです。天皇の体調の悪化に伴い、1921（大正 10）年には皇太子裕仁が摂政になりますが、その翌年には皇后が天皇の平癒を祈るため、わざわざ九州まで赴き、神功皇后をまつる香椎宮などに参拝します。皇后が九州に行くこと自体、神功皇后以来と言われました。皇后は香椎宮で、神功皇后の霊と一体になることを願う和歌を詠んでいます。そして神功皇后同様、九州からの帰途に軍艦に乗るのです。

一方、摂政になる直前に訪欧し、英国の王室から深い影響を受けて帰国した皇太子裕仁は、洋館に住み、ライフスタイルを完全に西洋風に改めてしまいました。このため、摂政になってからは天皇に代わって宮中祭祀を行わなければならなくなったのに、長時間にわたる正座ができず、1922 年の新嘗祭の日には地方視察を名目に四国の松山にいて、ビリヤードや将棋に興じていました。これが皇后節子の逆鱗に触れ、翌年になると裕仁は半年前の 5 月からもう新嘗祭の練習を始めています。しかし 9 月には関東大震災が起り、皇后節子はアマテラスが諫めていると考えます。節子は裕仁に対して、きちんと祭祀を行い、神を心から信じられなければ神罰があたると

警告を発するのです。

昭和になり、皇太后となった節子は、一方で光明皇后を意識しつつ、ハンセン病患者に対して手厚い保護を加えながらも、他方で神功皇后の霊と一体になったという思いを捨ててはありませんでした。その思いは、アジア太平洋戦争が勃発してから、一層強まります。折口信夫は、敗戦直後に書かれた「女帝考」のなかで、古代の天皇制には神と天皇の中間にナカツスメラミコト（中皇命、中天皇）と呼ばれる、天皇よりもいっそう神に近い女性がいたとし、神功皇后をナカツスメラミコトに相当する女性に挙げていますが、皇太后節子もまたナカツスメラミコトになっていたように思われます。

なぜなら、昭和天皇といえども、戦争中は皇太后節子の意向に逆らうことはできなかったように見えるからです。9月9日から公開が始まった『昭和天皇実録』により、1945年7月30日と8月2日という終戦直前の土壇場の時期に、天皇が応神天皇をまつる宇佐神宮と香椎宮に勅使を参向させ、「敵国撃破」を祈らせていたことが初めてわかりました。これは天皇自身の考えではなく、皇太后節子の意向を天皇が無視できなかったことの表れだったのではないのでしょうか。神功皇后の三韓征伐を事実と信じていた皇太后は、最後の最後まで戦勝を信じて疑わなかったように見えるのです。

敗戦とともに、軍事的なシンボルとしての神功皇后は否定されました。しかし、社会的弱者に慈愛を注ぐ光明皇后はモデルとして生き残ります。軍服を脱ぎ捨て、「現御神」であることを自ら否定した天皇は、1946年から54年まで、沖縄を除く全国を回り、数多くの病院を訪れました。これは戦後巡幸と呼ばれていますが、天皇制の存続を図るため、天皇自身が光明皇后にモデルを見出しているように思われます。

戦後巡幸には、皇后はほとんど同行しませんでした。昭和天皇の妻は良子、つまり香淳皇后です。戦後も蚕糸業奨励を目的とする地方訪問を続けたのは、皇后ではなく、皇太后節子でした。節子が1951年に狭心症で急死し、貞明皇后という追号が与えられると、ようやく皇后良子の時代が到来したかに見えましたが、それも長くは続きませんでした。1958年に皇太子明仁と正田美智子の婚約が発表されると、ミッチーブームが起こり、国民の関心は一気に皇太子妃となるこの女性へと向かったからです。

二人は1959年に結婚すると、積極的に国内ばかりか、外国にもしばしばそろって出かけました。この点は、歴代のどの皇后とも違っています。1968年に鹿児島県の国立療養所奄美和光園を訪れたのを皮切りに、今年までに現天皇とともに全国すべてのハンセン病施設を訪れたことも特筆すべきです。現皇后のこうした行動には、光明皇后の影が認められるとともに、1965年から72年までの7年間、相談相手として宮中に通い続けた精神科医の神谷美恵子の影響もあるように見えます。

現皇后は、宮中祭祀にも熱心です。この点は、宮中祭祀に全くといってよいほど出ない雅子皇太子妃と対照的です。現皇后は、貞明皇后とは異なり、神功皇后には思い入れをもっていないと思われるのですが、光明皇后をモデルとすることで、現天皇よりもいっそう神に近いナカツスメラミコトになっているかもしれません。